

Ⅲ 筑波大学聴覚障害学生が情報サポートを受けることによる支援ニーズの変化について

1 はじめに

筑波大学では聴覚障害学生とピア・チューターが協力して聴覚障害学生支援チームを形成し、支援活動の運営にも主体的に取り組んでいる。現在、OSD に支援を申請している聴覚障害学生が 19 名在籍している。聴覚障害学生支援の直接の担い手はピア・チューターであり、約 80 名の学生が支援に当たっている。主な支援システムは、複数の聴覚障害学生に対し複数のピア・チューターが支援する「支援者派遣型システム」である。チームの活動内容は、講義や大学の公の行事等の情報サポートの他、ピア・チューターの派遣コーディネート、養成講座の企画準備・開催、技術向上のための自主的勉強会、活動に使う物品の管理・メンテナンスなどである。これらは、サークル活動ではなく、障害学生支援室の指導のもと主体的な活動として行われている。現在の主な支援方法はノートテイク（要約筆記）、パソコン通訳（PC 要約筆記）、手話通訳である。これらの支援方法の中から、聴覚障害学生は希望に応じて申請することができ、ピア・チューターは可能な限り対応している。

ところで、筑波大学に在籍している聴覚障害学生の支援ニーズは様々である。情報サポート方法の中心は既に述べたような音声情報の文字への変換および要約筆記であるが、殆どの学生は高校までこのような情報サポートを受けた経験が少なく、大学入学後に情報サポートを受けることにより、その意識が高まってくるというのが現状である。また、支援に対する意識も高校まで受けてきた教育歴（聾学校、インテグレート等）やコミュニケーション方法の違いによっても異なっていると考えられ

る。

本研究では、聴覚障害学生が筑波大学に入学後、情報サポートを受けることにより、支援ニーズが変化していくプロセスについて、質問紙法による調査をおこない、大学移行時のスムーズな支援方法のあり方について検討することを目的とする。

2 方法

(1)対象

筑波大学に在籍し、情報サポートを受けている聴覚障害学生9名

(2)質問紙調査

高校までの教育歴、コミュニケーション方法、および大学入学後の支援方法や支援に対する考え方の変遷について質問紙を作成した。質問の主な項目は以下の通りである。

- ・基礎情報：年齢、性別、所属、聴覚障害についてなど
- ・高等学校までの状況
- ・大学での状況
- ・コミュニケーション方法、情報サポート、考え方

3 結果と考察

調査結果の集計を行った主な結果の一部を Fig.1 ～ Fig.2 に示す。Fig.1 に示されるように、「情報サポートを受けるようになってから、情報サポートに対する考え方や心情に変化がありましたか？」という質問に対し、9名全ての聴覚障害学生が、「はい」と回答した。このことから、情報サポートについては実際にそれを受けてみないことには情報サポートについての正しいイメージや認識が出来ないことを示している。入学前には情報サポートに過大な期待を抱いている場合、過少に評価している場合など個々人で異なるのかも知れないが、高校までは、筑波大学で現在行われているのに匹敵する情報サポートを受けたことが無いということが大きな理由であろう。また、Fig.2 に示されるように「情報サポートを受けたことをきっかけに、自分のニーズの変化はありました

か？」という質問に対し約半数の学生が「はい」と回答した。このことは情報サポートを受けることによってはじめて自分の知らなかったたくさんの方の音声情報があることに気づいたため、自分自身の潜在的ニーズに気づいたともいえよう。

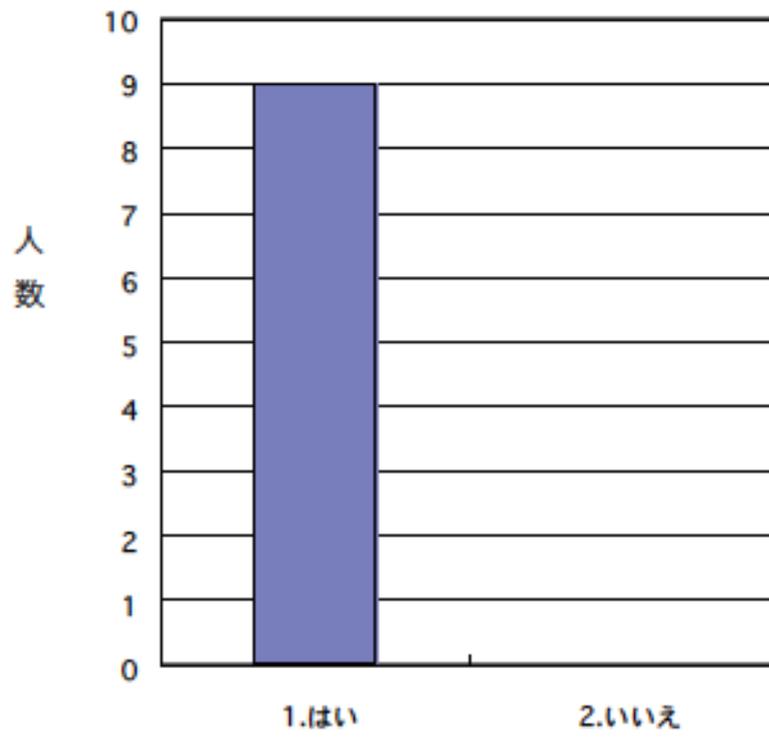


Fig. 1 考え方や心情の変化の有無

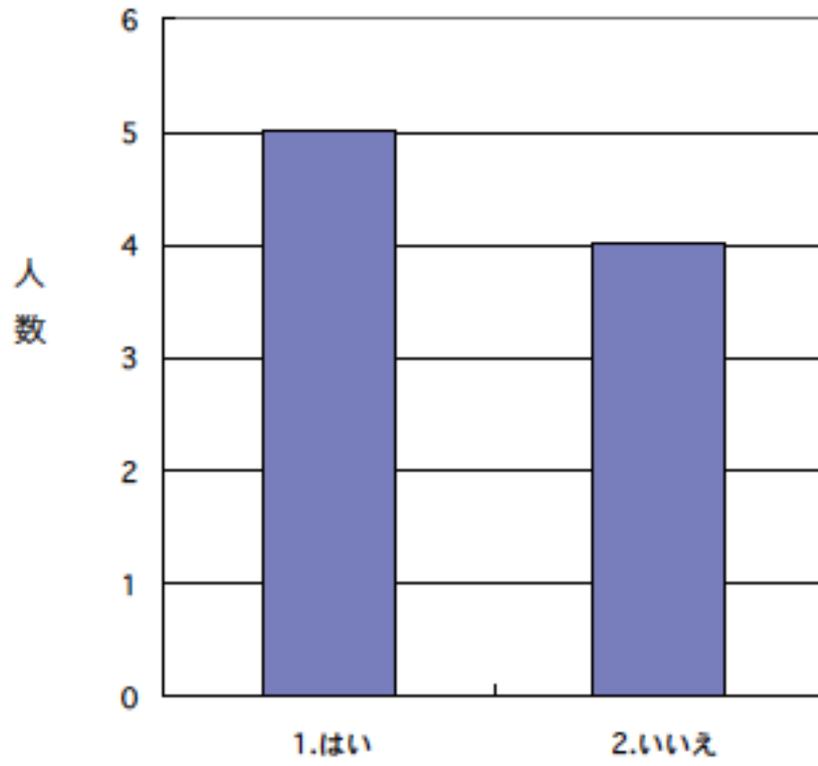


Fig. 2 ニーズの変化の有無